SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

実践参画型授業の試み：小学校における《スイミー》のワークショップと上演を通して

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学教育学部 公開日: 2013-04-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 薫子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7146

実践参画型授業の試み

――小学校における《スイミー》のワークショップと上演を通して――

山下　薫子（音楽教育講座）

はじめに

教育学部 3 年の学生を対象とした「音楽科教育法Ⅳ」では、平成 15 年度より実践参画型授業を実施している。今年度は大井川町立大井川南小学校にご協力いただき、3 年生 109 名を対象として音楽劇のワークショップと上演を行った。これまでは、大学生が小学生の前で自作の音楽劇を披露する、という内容であったが、今年度は「もっと子どもたちとふれあいたい」という学生からの要望に応える形で、新たにワークショップを盛り込むことになったのである。

1．参画型授業の趣旨と概要

受講生は、教育実践学専修 1 名、障害児教育専攻 2 名、音楽教育専修 16 名、音楽文化専攻 12 名、計 31 名である。この授業の目的は、小学校において《スイミー》を教材とした音楽劇のワークショップを行い、小学生とともに劇をつくりあげること、そして一連の活動を通して、音楽教師に必要な能力について、理解を深めることにある。

音楽文化専攻学生は、4 年次になってから教育実習に出かけるため、彼らにとっては、これが子どもたちと触れ合う初めての機会となる。

（1）事前指導

学校訪問に先立って、以下の内容で講義を行った。

・音楽科における音楽劇づくりの位置づけ
・特徴ある音楽指導法について（リトミック、オルフ、コダーイ、創造的音楽学習など／音楽劇づくりのヒントとして）
・指導計画と学習指導案の作成について
・ワークショップおよび音楽劇の実施計画について

（2）事前訪問（平成 17 年 12 月 20 日）

音楽科教育法Ⅳの授業担当者である筆者が、学生の作成した指導案を取りまとめ、事前に協力校へ持参し、担当教員の方々と打ち合わせを行った。

（3）ワークショップ（平成 18 年 1 月 10 日）

音楽劇の活動内容を「音楽」「ひびき」「動き」「朗読」という 4 つの要素に分け、それぞれを担当する学生たちが、小学生を対象として、物語の説明、イメージの喚起、アイディアの取りまとめ等の作業を行う。実際に小学生とかかわる時間が限られているため、活動内容を絞り込み、その趣旨と作業内容を的確に伝える能力が求められた。学生たちは、活動に集中し、豊かな発想を示す子どもたちの姿に感動した様子だった。

また、終了 30 分前には、4 つのグループが多目的ホールに集合し、全体を通してそれぞれの動きを確認した。

（4）音楽劇上演（1月16日）

ワークショップでの活動に基づき、体育館全体を使って、小学生と大学生が一緒に、音楽劇を披露した。当日は、同小学校1・2年生および保護者の参観があった。

（5）活動後の交流

小学生全員からお礼の手紙が届いたため、大学生が一人一人に返事を書いた。またワークショップおよび音楽劇本番の様子をDVD-Rに記録し、学生全員に手渡すとともに、小学校でも鑑賞していただけるようにコピーし、送付した。

2．音楽劇と教材曲《スイミー》について

音楽劇は、音と言葉、動きなど、様々な表現媒体が密接にかかわりあう、技の集合体と考えることができる。音楽劇を構成する経験は、音楽活動の広がりをもたらすのみならず、音楽学習の意味を問い直す機会にもなる。

レオ＝レオニ作、谷川俊太郎訳『スイミー』は、小学校2年生の国語教材として一部の教科書に掲載されている物語である。個々では非力である小さな魚たちが、スイミーの知恵によって協力しあい、大きな魚を追い出すというストーリー展開は、友情や役割分担の大切さといった点から子どもたちの気持ちを喚起することだろう。

薬師寺武夫作曲の合唱曲《スイミー》は、場面ごとに、テンポや調性が変化しており、その緊張感や登場人物の気持ちの変化を理解しやすい内容となっているため、ひびきづくりや動きづくりに適した教材であるといえる。

3．学習指導案

実施日：平成18年1月10日（火）10：30～12：10
平成18年1月16日（月）13：45～14：30
対象：大井川町立大井川南小学校　3年生児童109名
支援者：静岡大学教育学部3年　音楽科教育法Ⅳ履修生

（1）題材名：静大生と一緒に音楽劇《スイミー》を創りあげよう

（2）題材設定の理由：

音楽劇には、歌唱、器楽、創作など、様々な表現領域の音楽活動が含まれている。また、言語と身体の動き、視覚的要素などとも密接にかかわっているため、国語や体育、美術など、複数の教科で学習した内容を統合する働きをもっている。さらにこの表現活動の経験は、ミュージカル、オペラ、バレエ、あるいは歌舞伎など、本格的な舞台芸術の鑑賞でも、有効に働くものである。

今回のワークショップで取り上げる《スイミー》は、国語科の一部の教科書にも掲載されている、子どもたちにも親しみやすい内容の物語である。海の底を舞台としているために、視覚的にも、聴覚的にも、子どもたちの想像力を掻き立てることができるだろう。さらに、多様な音色とリズムを用いた「ひびきづくり」、魚たちの様子や場面の緊張感を身体表現する「動きづ

くり」、言葉のもつ響きやリズムの面白さを追究する「朗読」、そして想像的読みの内容に基づいて歌い上げる「合唱」の各チームに分かれて活動し、その後、それぞれの部分をつなぎ合わせてみることにより、自分の役割を強く意識できると同時に、友だちの表現をしっかりと受けとめようとする鑑賞への興味・関心が強まるものと考えられる。

小学校３年生と将来の教員をめざす大学生とが協力し合って１つの音楽劇を創り上げる過程において、心に残る感動体験が生まれるものと期待される。

（３）児童の実態（省略）

（４）題材の目標

①友だちおよび大学生と協力し合い、楽しみながら音楽劇を創り上げることができる。

②ひびき、身体の動き、言葉、音楽の共通点と相違点を理解しながら、場面のもつ緊張感や登場人物の気持ちを表現することができる。

③様々な領域の表現にふさわしい技能を身につける。

④友だちの声、響きや身体運動および合唱の表現を鑑賞して、そのよさを発見するとともに、それを自分の表現に生かすことができる。

（５）教材および教材選択の視点

○レオ＝レオニ作、谷川俊太郎訳『スイミー』

起承転結がはっきりしており、想像力を掻き立てる親しみやすい作品である。

○薬師寺武夫曲《スイミー》

場面ごとに、テンポや調性が変化しており、場面のもつ緊張感や登場人物の気持ちを理解しやすい内容となっている。

（６）指導計画（全３時間扱い）

第１次　第１時　全体説明とグループ分け、および各グループの活動

　　第２時　グループ活動と全体のあわせ

第２次　第３時　活動内容の確認と発表

（７）評価規準

①音楽劇に意欲的に取り組み、友だちおよび大学生と協力し合って、１つの作品を創りあげることができたか〔関心・意欲・態度〕。

②ひびき、動き、朗読、合唱の特徴を生かしながら、表現しようとしていたか〔音楽的な感受・表現の工夫〕。

③場面のもつ緊張感や登場人物の気持ちを表現することができたか〔表現の技能〕。

④友だちの表現から、よさや工夫を発見することができたか〔鑑賞の技術〕。

（８）本時の学習指導（第１～２時）

①本時の目標

○しっかりとしたリズム・音程で、元気よく歌えるようにする（音楽グループ）。

○場面のイメージにあったひびきを出せるように工夫する（ひびきづくりグループ）。

○声のひびきや間合いを工夫しながら、場面にあった表現の仕方を選んだり工夫したりする（朗読グループ）。

○登場人物の「わくわくする感じ」「怖い感じ」などの気持ちや、場面の「ぶくぶく」「ゆらゆら」などのイメージを、動きで表現できるようにする（動きづくりグループ）。

②本時の展開（グループ別）

ア）音楽グループ（９人）

	指導内容	学習活動	指導上の留意点（・）評価（☆）
導入（三十分）	・全体説明 ・発声練習	○〈こいぬのビンゴ〉でリズム遊びをする。 ○〈ドレミの歌〉を斉唱し、発声練習に代える。	・楽しく歌える雰囲気をつくる。 ☆良い表れを取り上げて励ます。
展開（五十分）	・《スイミー》の合唱	○歌詞を見て、音読する。 ○指導者が範唱するのを聴く。 ○斉唱をする。 ○フレーズごとに区切って練習し、曲の盛り上がりを意識しながら表現する。	・指導者の役割分担 オルガン１人 指導者　３人 支援者　６人 ・良い表れを取り上げて励ます。
まとめ（十分）	・まとめと感想	全体を通して歌う。	☆曲の盛り上がりを意識しているか。 ☆音程・リズムがとれているか。

イ）ひびきづくりグループ（５０人）

	指導内容	学習活動	指導上の留意点（・）評価（☆）
導入（二十分）	・全体説明 ・楽器の扱い方の説明 ・イメージづくり ・ひびきづくりについての全体説明 ・「海の場面」の説明	・物語について知る。 ・登場する動物を発表する。 ・海のイメージをつかむ。 ・舞台のイメージをもつ ・グループに分かれて、役割分担をする。	・想像力を掻き立てるようにする。

展開（五十分）	・海のイメージの表現 ・説明とグループ分け ・イメージづくりとひびき探し・選び	・ストロー、筒、下敷きなど、身の回りのものを用いて、様々な音色をみつける。 ・「海の場面」から「にじいろ」までのイメージをつかむ。 ・「にじいろ～」グループ活動 ・イメージについて話し合い、ワークシートに記入する。 ・楽器を選んで、ひびきづくりをする。 ・入るタイミングと終わるタイミングをつかむ。	☆積極的に楽器に触れようとしているか。 ・「にじいろ～いそぎんちゃく」までを書いた紙を貼る。 ・名札を配布する。 ・話し合いの記録をとる。 ・児童から意見が出ない場合は、ヒントを出す。 ☆音色や音の出し方を工夫しているか。 ・楽器が、うまく行き渡るように配慮する。
まとめ（二十分）	・ふりかえり ・全体練習	・感想をワークシートに書く。 ・朗読グループ、動きグループと合わせて、全体の流れをつかむ。	☆表現の重なりとその面白さを意識できているか。

ウ）動きづくりグループ（４５人）

	指導内容	学習活動	指導上の留意点（・）評価（☆）
導入（二十分）	・全体説明 ・動きのイメージの喚起	・「怪獣に追いかけられて逃げるとき」など、具体的な場面を想定して、動きのイメージを喚起する。	・イメージが沸きにくいときには、海底の音の録音などを用いて、適宜ヒントを出す。
	・擬音を用いたイメージの喚起	・「ぶくぶく」「ゆらゆら」などのイメージを身体の動きで表現する。	☆擬音や抽象的な言葉から動きが引き出せているか。
展開（五十分）	・グループ分け	・小グループに分かれて、意見を出し合いながら動きを考える。	・興奮して、怪我をしないように注意する。 ・適宜、発問しながら、意見をひきだすようにする。
	・他グループの鑑賞	・他グループの動きを見ながら、良いところや工夫されているところを発見する。 ・全体で合わせながら、出たり引っ込んだりするタイミングをつかむ。	☆他グループのよいところを自分たちの表現に生かすことができたか。

まとめ（二十分）	・ふりかえり ・全体練習	・感想や意見を述べ合う。 ・ひびきづくりグループ、朗読グループと合わせて、全体の流れをつかむ。 ・自分の出るタイミングと引っ込むタイミングをつかむ。	☆表現の重なりとその面白さを意識できているか。 ・タイミングをつかめるように、声かけをする。

エ）朗読グループ（５人）

	指導内容	学習活動	指導上の留意点（・）評価（☆）
導入（二十分）	・全体説明 ・発声練習 ・全体の流れの説明	・体をほぐす体操をする。 ・《スイミー》の合唱部分を、朗読する。	・リラックスして取り組めるようにする。 ・子どもたちと一緒に声をだす。
展開（五十分）	・役割分担 ・各自の練習 ・聴きあい ・通し練習	・自分のせりふを朗読する。 ・声の出し方や息の流し方によって、声色が変化することを知る。 ・場面や気持ちにあった間の取り方を工夫する。 ・友だちの朗読を聴き、自分の表現に生かす。 ・全体を通す中で、タイミングを取りながら朗読する。	☆場面にふさわしい表現の仕方を工夫しているか。 ☆友だちの良いところを見つけられたか。
まとめ（二十分）	・ふりかえり ・全体練習	・良かったところや問題点をみつける。 ・ひびきづくりグループ、動きグループと合わせて、全体の流れをつかむ。	・声かけをする。 ☆表現の重なりとその面白さを意識できているか。

４．ワークショップと音楽劇上演の実際

ワークショップに先立ち、担任の先生がスイミーの読み聞かせを行ってくださっていたため、小学生にストーリーを理解させる場面で大きな問題が生じることはなかった。しかし、子どもたちは、配役を決め、それぞれの役に合わせた動きやバックサウンドをつけるのだと思って活動に参加していたことから、「登場人物の気持ちや場面の持つ緊張感が見る人に伝わるよう表現を工夫する」ことを目標としていた大学生の意図との間に、大きな食い違いが見られた。

写真：動きグループの活動から（撮影：山下薫子）

それでも子どもたちは、自らの想像力を駆使しながら、大学生の要求に精一杯応えようとしていた。また大学生も、思いもかけない小学生のユニークなアイディアと出会い、自らの価値観が揺さぶられるのを感じていた。小学生と大学生が、技を介してコミュニケーションを深めることができたと言ってよいだろう。

５．学生の感想より

（１）一連の活動のなかで、特に努力したこと

子どもたちと同じ目線で、何を思って取り組んでいるのか、どこに興味を持っているのか、共感しながら一緒に音楽劇を創り上げていきたいと思って活動しました。私は朗読グループで直接にふれ合うことができる子どもの人数が少なかったことで、その分コミュニケーションをとることができる時間に恵まれていました。短時間で子どもを理解することは難しいと思いますが、その子がどんな子なのか、朗読という活動を通して知ろうと努めました。（楠恵理）

写真：学生のアンサンブル演奏（撮影：山下薫子

イメージを動きで表現するということに、子どもたちをうまく導入していけるように、発問の仕方や導き方を、決して誘導にならないように気をつけながら、考えた。（木之下朋代）

（２）ワークショップおよび本番で、成功したと思われること

私は響きグループで、最初の海の場面は下じきの担当でした。最初下じきになった子どもたちは、他のめずらしい楽器やおもしろそうな楽器の方がやりたそうで、どうしようかと思いましたが、下じきで音を出す練習をするうちに、「こうやったら、こんな音が出る！！」と言って、それぞれの子どもがいろんな音の出し方を考えることができました。身近にあるものからいろいろな音を、海のイメージにそって発見できたことは、音楽活動としてとても有意義だったと感じました。（柳田智美）

子どもたちからあげられた言葉をもとに動きをつける場面で、それぞれ個々で動きを考え、意見を出しあっている場面が見られたこと。また、出た意見を具体的にどうつなげるかなど、子どもたちが主体的に紙に動きを書いたりして流れをつかもうとしていたこと。（小泉あゆみ）

（3）ワークショップおよび本番で、うまくいかなかったと思われること

子どもたちが自分達の活動だけで頭がいっぱいで、他のグループの活動にあまり目がいっていなかったように思えることです。響きの子どもたちも本番、動きグループの演技を見て、思うところはあったようでしたが、全体で１つのものをつくりだしたという意識は少なかったのでは？と思いました。（曽根彰子）

やはり時間配分です。「15 分あれば、この活動はできるだろう」と思っていたことも、実際は全く時間が足りず、すぐに本番となってしまいました。また、私の子供に対する質問のなげかけや説明が長かったことが原因だと思います。（中村礼乃）

（4）子どもたちが熱中していたと感じられた場面

イメージに合った音を探している場面が印象的でした。特に楽器を決めた後、「どのようにたたいたら、言葉から想像できるイメージと一緒になるかな？　たたき方を工夫してごらん。」という問いかけに対し、試行錯誤している姿が最も強く残っています。（藤村美雅）

一人の子どもがイメージをもとに動きを考えたものに対して、他の子どもがより良いものにしていこうとして、「ここをこうしたら？」というような発言が見られたり、実際に表現をしたりしていたところ。また、本番では、他の動きグループやひびきグループの活動を見ているときに、非常に真剣な顔つきで、興味を持った感じであった。（池内友美）

（5）一連の活動を通して、自分に身についたと思う力・知識

即座に子どもたちの意見を全体の動きとして使えないか考え、発展させる力が身についた。個人から出たささいな意見でも見落とさずに拾い、全体に返すことができた。また、短い時間の中で子どもたちを動かす力もついたと思う。（高森優）

子どもたちに様々な意見を言われて、当初は大変戸惑ったが、それら全てに正しい答え、間違った答えというものはなく、全部違って全部いいんだ、と思う力が身に付いたように思う。また、校長先生がおっしゃったように、優しいときは優しく、厳しいときは厳しくしなければ、本当の教育ではない、ということも知識として身に付けることができた。（大西弘美）

（6）その他、自由な感想

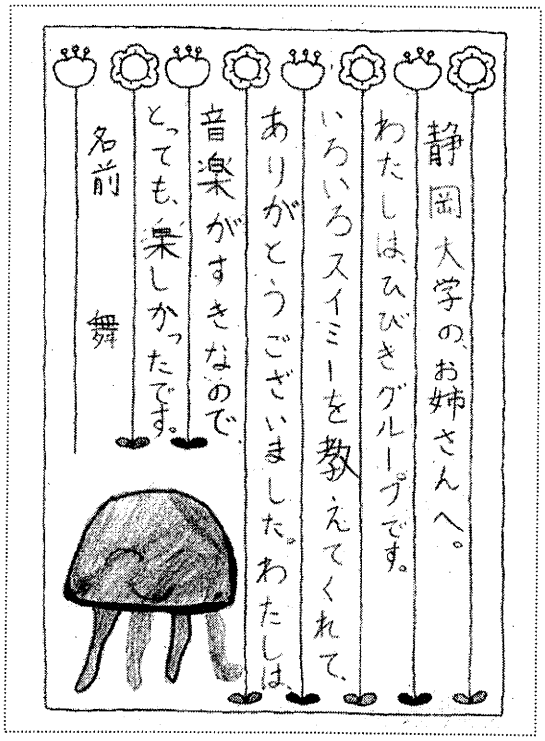
子どもたちとの活動を通して、１つの劇をつくっていくことは、とても楽しかったです。時間があまりなかったので、私たちが指導する場面も多くなってしまいましたが、もっと子どもたちとの活動の時間が多くとれれば、子どもたちの主体的な活動も増えたのではないかなぁと思いました。子どもたちとの活動を通して、子どもたちの発想力にはとても驚かされました。そして子どもたちの発想をひき出す支援のしかたの難しさも実感しました。（池谷泉穂）

ワークショップの経験が少ないので、うまく進められるのかとても不安でした。（中略）実際に小学校へ行って、児童たちが熱中して動いているのをみて、頑張って何度も打ち合せして良かったなと思いました。また、授業中でも、同じグループの人たちと二言三言だけで内容を少し変えたり、進行の確認や調整を臨機応変に予想外の事に対応することができ、身にもついたと思います。また、学級の中には実にたくさんのタイプの児童（厳密には一人一人違うのです

が）がいて、彼らとの接し方が難しいと感じましたが、少しは慣れたかなと思いました。（鈴木加奈子）

６．小学生からの手紙

（１）ひびきづくりグループの大学生の人へ。ひびきづくりは少しかわった音やがっきを見たり、きいたりしました。少し音を考えるのはむずかしかったけど、意見をたくさん出しあいました。わかった事は、１つのがっきでも、くふうすればたくさんの音が出せることです。ありがとうございました。里香



図：小学生から届いた手紙の一例

（２）大学生のみな様へ　こんにちは、この前はおせわになりました。わたしはろう読グループでした。（中略）グループでは、やさしくしてくれたり、わかりやすくせつ明をしてくれたので、2 時間ですぐわかりました。楽しかったです。大学生のみなさんはやさしくていっぱい、いろいろなことをおしえてくれてやさしいなぁと思いました。発表会では、おねえさんたちは、はずかしがらずにできるのがすごいなと思います。はずかしくてわたしはたまりませんでした。わたしは大学に行きたくないけど、少しはいこうかなぁと思えました。（中略）また今度あえたらいいなと思います。先生になって南小にきてください。愛

（３）大学生のみなさんへ　こんにちは、わたしはうごきグループでした。わたしは、いろんな魚を考えたり、どんなさかなになるかをかんがえるのがたいへんでした。大学生の人がていねいに、わかりやすくやりかたをおしえてくれたのでルールもすぐにおぼえました。発表会のときは、わたしのいもうともいたし、いもうとの友だち、１・２年生もいたのですこしきんちょうしてしまいました。わたしは大学生にもうあえないのがざんねんです。またあえればいいですね。絢香

（４）大学生のみなさんへ　こんにちは。（中略）音楽グループ、思ったより男子が多かったのでほっとしました。みんなで歌を歌うと音がずれるかと思ったけど、音がそろってよかったです。うたをはじめかられんしゅうするのではなく、みんながしっているきょくかられんしゅうしたので、おぼえやすかったよ。発表会のほんばん前のれんしゅうの時、きんちょうしたけど歌をうたったらきもちがよくなりました。ほんばんは、うまく歌えました。えんそううまかったよ。先生になったら大井川南小にきてね。正章

7．協力校の教諭の意見

活動の成果と課題　　内山　友里

○　事前指導した内容について

各クラスで「スイミー」の読み聞かせを行った。読み聞かせは週１回行われており、子供たちも慣れ親しんでいる。しかし、一度聞いただけではストーリーが何となくわかる程度なので、劇の練習で表現を考える際に戸惑いがあったように思う。自分で表現を考えていく際には、何度も物語を読み込み子供の中に「表現したい」という強い思いが不可欠だ。国語科で扱った教材を用いたり、そうでなければ、事前に「スイミー」の物語をもう少し読み深めたりする必要があった。

朗読グループを希望する子供には、台本の一節を渡しオーディションを行った。選抜の基準は、①マイクがなくても聞こえる声で朗読できること、②気持ちを込めて朗読できることである。この時点で、読む速さや声の大きさ、間合いを自分なりに書き込んでかなり練習を積んでいる子供も見られた。ここでも、読み込むことの大切さが見て取れる。オーディションを行ったこともあり、朗読グループは「表現したい」という思いが高まった状態で臨むことができたのではないか。

音楽グループに限らず、全員が「スイミー」を歌えるように各クラスで練習をした。歌をみんなで歌いながら、劇づくりの意欲が湧いてきたようであった。大学生との活動はグループで分かれての練習だったので、全員で歌うこの練習は、仲間意識の強い３年生にとって意欲を高めるものとなった。しかし、担任が音楽を担当するクラスと、そうでないクラスとで練習に差が生じてしまうので、音源テープを利用するなど手だてを持ちたい。

○　子供たちがもっとも熱中していたと思われた場面について

響きづくりグループにおいては、普段あまり触ったことのない楽器を目にしたり身近なものが楽器になってしまったりする驚きが、子供を夢中にさせた。音楽を得意とする大学生がいたからこそできたことである。泡がぶくぶくする音や下敷きを上下に折って出す音に耳を傾け、小さな小さな音を聴こうとしていた。さらに、自分が担当する役に合った楽器を選ぶ時には、「シンバルは（えびえび隊に）なかなか合ってるね。」「太鼓も入れてみようよ。」など、グループ内の友達とのかかわりが生まれていた。

しかし、「耳を澄ませて音を聴く」ということを考えてみると、同時に音が鳴っている環境では特に、小さい音はかき消されてしまうので、響きを追求する際には環境に配慮したい。さらに、「表現」ということを考えると、「自分がやってみたい楽器」が、単に面白そうだからなのか、役に合っているからなのか、検証していく必要がある。ここでも、物語の読みが深まっていることが重要になってくるだろう。

○　大学生との交流について

大学生による生演奏や、身近なものを楽器として使うというアイディアは、子供にとってはもちろん、教師にとっても新鮮なものであり、音楽科の概念を広げるものとなった。また、

31名の学生が子供に寄り添いながら活動をしていくことで、きめ細かい指導ができ、子供も安心して取り組むことができた。たった2回の練習で本番を迎えることができたのも、大学生の事前の準備や配慮があったからこそである。

このような大学生の実践参画型の授業では、大学生の「子供と関わる力」が問われるだろう。「先生でも友達でもない、お兄さんお姉さん」として、どこまで子供の活動をサポートし、ねらいに迫れるかが鍵である。具体的な例を挙げれば、動きづくりグループで、恥ずかしがり屋や引っ込み思案でなかなか動き出せない子供たちとどう関わることができたかである。子供の実態を知る教師と事前の打ち合わせを十分にし、いくつかの手だてを持って臨みたい。指導案を書く際にもこの点をはっきりさせるとよいのではないだろうか。

○ 事前の打ち合わせについて

今回、初めての試みであったこともあり、教師側が活動内容を明確に理解していなかったため、十分な指導ができなかったところがある。どのような活動をどのように行うのかを、大学生と教師が紙面上だけではなく直接話し合い、共通理解を図りたい。

8．成果と今後の課題

今年度の音楽科教育法Ⅳの授業では、音楽劇の上演に加え、小学生を対象とした音楽劇づくりのワークショップを取り入れたことにより、次のような収穫があった。

1．音楽、ひびき、動き、朗読という「技」の獲得

2．技を獲得するプロセスで、小学生の豊かな発想に出会えたこと

3．小学生のさまざまな「つまずき」に出会い、その解決策を一緒に考えたこと

今後に残された課題としては、学校訪問の時間をどのように確保するかという問題がある。今回は、協力校が遠方にあったため、移動に多くの時間を要した。だからといって、学校訪問のために他の授業を欠席させるようなことがあってはならないだろう。そのため、大学の授業が始まる前の1月上旬に訪問日を設定してもなお、十分な時間を確保することができなかった。今後、より密度の濃い活動を展開しようとするならば、大学の近隣校に協力を仰ぐなどの改善が必要である。

9．謝　辞

本授業の実施にあたり、大井川町立大井川南小学校の教職員の皆様に大変お世話になりました。校長奥川重子先生をはじめ、教頭藤ヶ谷秀幸先生、3年生担任の飯塚登美惠先生、内山友里先生、増田晃先生、穐山眞智子先生の温かいご指導なくして、この実践参画型授業は実施しえなかったと思っております。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。